

聞き手 脇浜紀子さん ● 京都産業大学現代社会学部教授

株式会社 石村萬盛堂 専務 石村一枝さん

さんに聞く



いしむら・かずえ
福岡市出身、福岡女学院
大学卒。バレンタイン
デーのお返しをする日と
して日本で定着している
「ホワイトデー」を考案し
た、博多を代表する菓子
店「石村萬盛堂」の3代
目社長・石村善悟さんの
妻。プロボイスの言葉は
「社会と接点を持つことに
よって、人は成長する。
だから、君も一緒に働い
てもらいたい」。女性は家
庭に入るのが当たり前の
時代に、夫婦で経営を
行ってきた。

ホワイトデーが誕生したのは マシュマロの売り上げ促進のため

脇浜 本日は、博多銘菓「鶴乃子」でおなじみの石村萬盛堂の本店におじゃまして、専務でいらつしゃいます石村一枝さんにお話をうかがいます。

ではまず、ご存じの方も多いと思いますが、石村萬盛堂について、ご紹介いただけますでしょうか。

石村 石村萬盛堂は1905（明治38）年に石村善太郎が創業し、今年で114年になります。福岡には、日本三大銘菓の一つに数えられるポルトガル伝来の南蛮菓子「鶏卵素麺」がありますが、石村萬盛堂も創業当時から鶏卵素麺を作っていました。しかし、卵の黄身だけを使うために卵白が大量に余り、なんとかできないかと考えた善太郎は、泡立てた卵白で餡を包んだお菓子を開発します。さらに、森永製菓の創業者である森永太一郎さんが米国から伝えた、当

時は珍しかったマシユマロの製法を教えてください。ただ、餡を純白のマシユマロで包んだ鶴乃子が誕生したというわけです。「鶴乃子」をつくった初代の善太郎から数えて、現在は4代目となります。

私が石村の家に嫁いでまず思ったのは、祖父の善太郎が、マシユマロという当時は最先端の「洋」の素材と「和」の餡をマツチングさせたこと。その時代に、すごい発想だと思いました。

脇浜 お菓子のイノベーションですね。

石村 本当にそう思います。「和と洋の融合」という精神は石村萬盛堂に脈々と受け継がれており、例えばホワイトデーもそうだと思います。

脇浜 ホワイトデーは、こちらが発案なされたんですね。

石村 ええ。昭和52年のことです。「このふわふわのマシユマロがもつと売れたらいいの」と常に思っていました。たまたま雑誌を見ていたら、「バレンタインデー」に

チョコレートも贈っても、お返しがないのは不公平だという投書が載っていました。

キャンディーやマシユマロでもいいから、と。そこで夫と「いただいたチョコレートを、白いマシユマロで優しく包んでお返しする」ということを思いつき、最初は「マシユマロデー」といつてスタートさせました。

さらに、それを2月14日の後のいつにするかで、悩みました。1週間後では早すぎ、1カ月後では忘れるかもしれないなどあれこれ悩み、お世話になつていいるデパートの仕入担当の方に相談したところ、即座に「3月が暇だから」と言われ、1カ月後の3月14日になったのです。あっさりと3月に決まりました。

脇浜 私たちが毎年大騒ぎしているホワイトデーの日付は、そんなところで決まったのですか。

石村 そうなんです。その数年後には、「マシユマロの白」を連想させる「ホワイトデー」に名前を変えました。「洋」のバレン

ティンデーとセットで、日本のホワイトデーの文化が定着したと思います。

新しく始めた洋菓子は

夫の名前から付けた「ボンサンク」

石村 昭和50年頃のことだと思いますが、彼が「これからは、洋菓子だね」と。当時、博多で洋菓子を売っているお店はまだそれほど多くなく、うちでもほとんど作っていませんでした。そもそも、男性がケーキを買って家に帰ることさえ恥ずかしいというような時代だったので。今でも、バレンタインデーやホワイトデーにお店に行つて、お菓子のケースの前に一人で並ぶのは恥ずかしいと答える男性が少なくありません。

夫が高校生の頃、創業者であるおじいちゃんにこう言われたことがあったそうです。「男が洋菓子を買って帰るのは恥ずかしいので、買ったらすぐバッグに入れる。だから、バッグの中で縦になつても横になつてもこわれないケーキのように美味しいお菓子を

石村 一枝さん



作ってくれないかと」と。

2代目善石もやはり斬新な発想を持った人で、戦前にフランスから有名シェフを博多に招聘しケーキづくりをはじめました。代々自由な発想をもっている石村家でした。

夫と二人で、まず洋菓子の名前から決めるようにしたのですが、なかなか決まりませんでした。当時は女性雑誌の販売部数が落ちると、必ずやるのが三つあると雑誌編集の人が言っていたのを思い出しました。

それは「京都」「痩せる」「パリ」の特集のいずれかです。それを思い出し、洋菓子なら憧れのパリだということで、パリ市街の

地図を引つ張り出して、ジョルジュサンクとかラ・セーヌとかいろいろ地名を探していたら、夫が「ボンサンク」はどうかと提案しました。私はもう疲れていたもので、「あ、いいね。それはどこにあるの?」と聞いたら、僕の名前だと言うのです。

脇浜 なるほど。善悟様の「善」がフランス語で「ボン」で、「5(悟)」が「サンク」ですね。

石村 ええ、「博多のしゃれもん」というか、博多ってそういう感覚がある街なんです。それでボンサンクに決めて、さらに、おじいちゃんが言っていた「縦にしても横にしてもいい洋菓子」を工夫して、和菓子とはお店を分けてスタートしました。

和菓子だけの店から洋菓子ボンサンクが加わりました。

いろいろな経験を 子どもと一緒に成長してきた

脇浜 昨年、30代の二人の息子さんが社長

と副社長におさまったそうですね。

石村 子どもって、親の話をしっかり聞いているんだと思いました。私が、学生時代にもっと英語を勉強しておけばよかったという話をよくしていたのを次男が聞いていて、高校の時に米国に留学し、その後ノーイスタン大学に入り、卒業後はかつて私が働いた広告代理店に入社しました。これも、私が勤めていた頃の楽しかった思い出をよく聞かせたせいかもしれません。しかも彼は山笠で育ったので、「就職先は山笠に出られる会社」といって、最初から福岡を希望しました。地元愛が人一倍強く、退社して石村萬盛堂に入りました。長男も大手の会計事務所を辞めて来てくれました。

長男は生まれつき聴覚に障害があり、高校受験の時の英語のヒアリングは0点でした。大学は父親と同じ東京大学を志望し、ヒアリングができないので他の方法で受験させてもらうよう手紙を出したところ、前例がないからいったんは断られたものの、

耳が不自由な人の新しい受験の取り組みを東京大学が実行して下さいました。もう、20年近く前の話です。私は、こうしているような経験をして、子どもと一緒に成長してきたような気がします。

脇浜 仕事と子育てを、ずっと両立させておいでになったのですね。

石村 そうなんです。結婚する前に「社会と接点を持つことで人は成長するんだから、君も成長してほしい」と言われ、「私のことを思って言ってくれてるんだったら、働こう」と、夫と働く約束をしました。しかし、いざ子どもを保育園に預けるとなると、実家の母は「とんでもない、自分が面倒を見るから」と言い出したほどです。しかし、夫は厳しく、「君は働きながら子育てをする」と約束したのだから、それは守らなくてはいけない」と言われました。毎朝、子どもを保育園へ預けに行くと、ガラス戸にアマガエルのようにへばりつき、泣き続けていました。夕方になって迎えに行くと、また

へばりついて泣いていて、一日中泣いていたのかと思うと私も泣きたくなりました。

脇浜 結果的には、それがよかったのですね。

石村 子どもにとってもそうだし、私も働くことの厳しさや約束を守ることの大切さを教えられました。

脇浜 ではお二人の息子さんは、今は抵抗なく家業をお継ぎになると感じですか。

石村 しょうがない、もう見ていられないと思ったのではないでしょうか。会社員時代のほうがよかったと言っていますが(笑)。二人とも、変えなきゃいけないと頑張っています。

50歳を過ぎてから大学に入り直して マーケティングを学んだ

脇浜 今、社会人になってから再び大学で学ぶ「リカレント教育」が注目されていますが、石村さんも50歳を過ぎてから大学に入り直されたそうですね。どういうきっかけでしたか。

けでしたか。

石村 私は福岡女学院の短大卒でしたが、仕事を通していろいろな方とお付き合いしていくうちにもっと理論的に学びたいと思うようになりました。また、仕事ではずっとマーケティングも担当してきたので、大学でマーケティングをきちんと学びたいという気持ちもありました。その頃、母校の福岡女学院の社会人入学がスタートした年でした。

女性の子育てが一段落したとき、趣味の世界を楽しむのもいいと思いますし、そこから自分の人生をどう歩んでいくかとか、



脇浜 紀子さん

世の中にどう貢献できるかと考えて大学で学び直す、大学で幅広い意見やものの見方に触れるということも、とてもいいのではないかと思います。

脇浜 具体的には、どのような授業をお受けになりましたか。

石村 印象に残っているのは、やはりマーケティングです。先生の講義を聴きながら、「そうそう、そのとおり」とか「いや、私が経験した現場はちよつと違う」などと思つて、先生と話し合ったのがとても楽しかったですね。

脇浜 理論の世界と実践とでは、確かにちよつと違う部分もあります。

石村 そうなんです。また、ジェンダーに関する問題が社会でどんどんいわれるようになった頃でしたが、授業でより深く学び、改めて考えさせられました。



50歳くらいまでなら、その後の人生を再設計できることに気付いた

脇浜 年齢の離れた若い学生と一緒に学ぶことに、違和感や抵抗感はありませんでした。

石村 違和感なく過ごせました。ただ、仕

事を続けながらだったので、時間の調整が大変でした。

大学には自然な感じで迎え入れていただき、若い頃に教わった先生が元気でいらっしやつて、以前と同じように接してくださつたこともあり、本当にいい学校だと心から思いました。

人生設計つて本当に大事だと思いますが、二十歳前後の学生時代にはよく分からなかったことが、年齢を重ねるといろんなことがみえてくる。私は、50歳くらいまでであればその後の人生を再設計できるのではないかと、50歳を少し過ぎてからですが大学に入りました。

脇浜 分かります。私も仕事を続けながら大学に通い、43歳の時に博士号を取得し、50歳で放送局を退社して新しい人生を始めました。50歳からの人生設計が可能な時代になったと感じています。

石村 私が学び直すと思つたきっかけの一つは、やはり夫ですね。一緒にお菓子屋

さんを経営しているだけではなく、彼は地元の経済界の活動に参加したり、学校時代の友人や先輩後輩がいるいろんな分野で活躍なさっていて、そういう方々とお付き合ひがあったり、というのを身近に見ていると私も視野が広がって、改めて自分の人生設計を考えました。ちょうど母校が社会人入



学制度を始めたと聞いたので、もう一度自分を見つめなおせるのではないかと思っ入学したので。

私が社会人入学をした頃と時代が大きく変わっているのです、新しい社会人入学のあり方も変わっていると思います。

脇浜 大学経営も、石村萬盛堂のような会社経営と似ているところがありますね。歴史や伝統は守るものの、新しいこともやっていかなければならない。

石村 時代が大変なスピードで変化しているときに、変えてはいけけないもの、われわれの場合は鶴乃子ですが、それは守りつつ、新しいことを積極的に進める必要があることを痛感します。うちもかつては路面店の売り上げが多かったのですが、車社会になり、ポリウムゾーンのお客様が高齢になると、わざわざお店まで歩いていらっしやらない。一方で、ネット通販やコンビニなどの新しい流通経路が出てきました。では、既存の路面店はどうするか。そこを変える

には、相当のエネルギーが必要です。

脇浜 ずっと実践でやってこられて、さらに大学で学び直して、まさにレベルアップなさった感じですね。今のお言葉は、とても重みがあります。

石村萬盛堂を次の世代に伝えるために役割をしっかりと果たしてください

脇浜 石村さんは中学から福岡女学院に通われました。

石村 ええ、中学・高校と6年間一貫教育でした。毎日がとても楽しかったし、教養が自然と身に付くような学校でした。ミッション系の学校で、英語はネイティブの先生でしたし、全員がピアノを習いました。先生方の立ち居振る舞いにとっても品があって、こちらも自然にそれが身に付く6年間でした。

脇浜 高校を卒業して、そのまま短大に進学なさいました。

石村 短大で英語を学ぼうと思ったのです

が、父から「女は英語なんか勉強せんでもいい」と言われ、家政科に入りました。そんな時代だったんですね。

脇浜 ご両親はどちらかというと古い日本の考えですが、結婚相手は非常に進歩的だったようです。

石村 進歩的な家でしたね。

結婚前は、石村は古い家だから入ったら大変だろうな、お正月にはおせ

ち料理をたくさん作ってお客様も多いんだろなどと覚悟していました。ところが、石村の母は「お正月は忙しいけん、お料理は外からとろうね」と言ってくれて。今でこそおせちの予約は普通ですが、三十何年前ですら、すばらしい論理的な母でした。

脇浜 なかなか革新的なお母さんでしたね。

石村 母も働いておりましたし頭のいい方で、あなたは石村萬盛堂を次の世代に伝える役割があるから、しっかり仕事をしてね



と言われました。

脇浜 創業者の思いが、ずっと受け継がれているんですね。

女性の活躍を支援する福岡発のプロジェクトをスタートさせたい

脇浜 石村さんはお仕事だけではなく、女性の活躍をサポートする活動もなさっています。

石村 ミッション系の学校で教育を受けたからか、困っている人を見ると居ても立つ

てもいられず、手を差しのべるところがあります。

特に、女性で頑張っている人を見ると何かお手伝いできないかと思います。例えば企業の中で頑張つて素晴らしいキャリアを積んできた女性が、ある年齢に達すると活躍の場を次の世代に渡さなければならぬことがあり、実力があるのに発揮できなくなる。非常にもつたいないですよ。女性の活躍を支援する何かをスタートさせたいと思つているところです。

脇浜 確かなキャリアのある女性を、もつと生かしたいということですね。

石村 ええ。私の周りを見ても、働きたいのにその場がないという女性が少なくありません。

脇浜 ぜひ女性支援の福岡モデルをつくつて、全国に広めてください。

石村 私のもう一つのテーマは、障害者の就労です。長男が聴覚に障害があるために考えるようになったのですが、そうでなかつ

たら気付かなかったかもしれない。

障害者の方が、今も工場や店舗で働いています。周りのスタッフも、一緒に働くことで学ぶことも多いようです。

脇浜 いろいろな社会活動の場で、そういったエピソードをお話しになると、聞いている皆さんはきつと元気づけられるでしょうね。

社会の現場に手で触れながら 仕事をしなければいけない

石村 福岡は中国や韓国やいろいろな国から訪れる観光客が大変な数に上り、インバウンドですごくいい熱気です。国も観光ということに力を注いでいます。最初のころは炊飯器を何台も持って帰国される風景を目にしましたが、せっかかくおいしくたける炊飯器があっても美味しいお米がないといってブランド米を買って帰られるようになり、さらに化粧品やエステに関心の対象が移っています。こういうことは、集計されたデー

タだけ見てもすぐには分からない。もっと、お店や街角といった「社会の現場」で手で触れながら仕事をしなければいけないと思います。

脇浜 それはとてもよく分かります。

石村さんは、やりたいことがまだまだたくさんおありですね。お休みの日は、趣味とかスポーツとするとか、どうやってお過ごし



石村一枝さん（右）と脇浜紀子さん
（2018年9月20日 石村萬盛堂本店前にて）

しになっていらつしやいますか。

石村 ポーツとテレビや新聞を見ていても、これはいいなとか、これはあの仕事に使えるなどといったいい考えが生まれて。美容室で雑誌を見ていても、気になる記事を見つけると「すみません、このページを切り取って、ただだけませんでしようか」とか。

私にとつて、仕事は日々の時間の中に息づいているようなものですから。

脇浜 やはり、情熱を持ち続けないとだめですよ。

石村 そうですね。息子たちから、どうしてそんなに頑張るのかと。ただただ好きなんですよね。

脇浜 本日は興味深いお話をたっぷりとおうかがいでき、ありがとうございました。